

聞き手の発話行為にみる共話のストラテジー

大塚明子

専修大学 文学研究科

Email: mayko@msc.biglobe.ne.jp

1 はじめに

日本語の会話の特徴は「共話」だと言われる。しかし、日本語母語話者も日本語学習者も共話をどのように行うかについて具体的に学ぶことはない。日本語の教科書にある会話は母語話者同士の自然会話の実態に即しているとは言い難く、母語話者においても会話コミュニケーションに苦手意識をもつ者が多いと言われる。グローバル化が進むなかで、他者と日本語でコミュニケーションを図る場合には、共話を軸に日本語力やコミュニケーションスキルの向上に考える必要があるのではないだろうか。

また近年、会話ロボットの開発において、いかに人間らしく会話をするかをテーマにした流れにのった開発の進化のなかで、コミュニケーションを主体に考え、非流暢に会話することで人間から能動的な言語行為を引き出す「弱いロボット」(岡田, 2017) や「役に立たないロボット」(林, 2018) などの開発が注目されている。これらは不完全であることによって相手から能動的な行為を引き出す、つまり、レジリエンス作用によってコミュニケーションをはかる(岡田, 2017) のである。

相手が不完全な言語行為をすると、人は能動的に発話して補おうとする。このレジリエンス作用が、共話を成立させる鍵となっているのではないか。本研究は、共話を軸に実際の言語行為を観察し、共話のストラテジーの一端を見出そうとするものである。

2 研究対象

2.1 観察・分析の対象

会話の鍵を握るのは聞き手であると言われているが、聞き方の研究は多くない。そこで、雑誌インタビューのために行われた聞き手の言語行為および、それに対する話し手の反応を観察・分析することで、聞き手のストラテジーを明らかにする。なお、インタビュアーのストラテジーを方法論として学術的に述べた先行研究は管見の限りない。

観察・分析の対象とした雑誌のインタビューは、発行部数約 20 万部の女性ミドルエイジ (30~50 歳代) を対象とした、ライフスタイル総合誌である。雑誌のコンセプトは、美容、ファッション、食、インテリア、旅、家事など、生活全般をテーマに、30 歳後半から 40 代の、知的好奇心旺盛な女性に向けて、生活スタイルを提案するものである(媒体資料より)。

インタビュイーは、各界著名人(女優、作家、歌手、アナウンサー、アスリート、脚本家など) および専門家(研究者など) で、インタビューのテーマは美容や健康、生き方などである。

2007年3月~2018年7月に行われたインタビュー127本(音声データ、音声データの書き起こしデータ)をELANでアノテーション、もしくは会話分析手法を用いて観察・分析を行った。

2.2 データ観察の着眼点

以下に着目して特出した部分を詳細に観察する。

- ①インタビュー者の言語行為／ルーティンの有無、あいづちの回数、場所、種類
語尾
より具体的に、または、より詳細に聞きたいとき
スピーチレベルのシフト
パラ言語（笑い）

- ②インタビュー者の言語行為／上記 a. ～f. が起こったときの反応

笑い、冗談

インタビュー者の意図通りの答えをしているとき・していないとき

さらにインタビュー者の内省も含めて分析し、偶発ではないと思われる言語行為をインタビュー成功の、もしくは失敗のストラテジーとして抽出する。まったく同じ言語行為が複数回におよび観察された場合は、そのなかの1つを代表例として取り上げる。

3 共話をつくるストラテジー

上記の観察・分析により、共話をつくるストラテジーとして以下がみられた。

3.1 中途終了型発話によるレジリエンス

不完全なものを補完して完全なものにしたくなるという人のレジリエンス作用を利用したストラテジーである。中途終了型発話の機能は、宇佐美(2012)らにより、①共話を成立させる、②おしつけがましさを避けながら自分の言いたいことを述べる ③言いよどんでいる内容を察知して聞き手が先を引き取り、話を完結させる ④ターン譲渡のサイン ⑤話し手の話す内容を理解していることを伝える、の5つに分類される。

雑誌のためのインタビューで行われた会話を観察すると、レジリエンスによってインタビュー者のナラティブを引き出すインタビュー者の中途終了型発話は、引き出したいナラティブの内容によって次の3つの目的で使われていることがわかった。

①緩和的限定：聞きたいナラティブの内容を予め緩和的に絞り込む

②共同想起：インタビュー者と自己同一化をはかり、前述の内容の発想を広げたり、思い出したりすることで詳細に話すことを促す

③ガイダンス：前述を具体的に、または、その先を話すことを促す

しかし、このストラテジーは、中途終了型発話がバフチン(1979)による<内的説得力のある言葉>である場合は成功し、<権威的な言葉>の場合には失敗する場合があった。また、インタビュー者とインタビュー者の、当該話題に関するコンテキストに差がある場合、ストラテジーとしての成立は難しくなる。

3.2 インタビュー者の自己開示

自己開示は(西田ほか, 1989)で、自分のことを人に打ち明けることと定義され、相互の自己開示の深さ、および話題の選択は、対人関係の親密化や進展に影響を及ぼしているとされる。岡本(2007)

は、一方が自己開示を行うとそれを受けた者が同程度の自己開示を“お返し”をするという「自己開示の返報性」と呼ばれる行動パターンがみられ、会話の回数が増えると自己開示の返報性が増加することを確認した。雑誌のためのインタビューでは、インタビュー어의ナラティブを引き出すことが目的だが、インタビュアーが自分のことを話す、つまり、自己開示する例が観察された。以下は、実際の例である。

ER:インタビュアー EE:インタビューー 下線:ERのストラテジー 波線:ストラテジーによって引き出された発話

- 01 ER: よく自分が元気なさそうに見えると、みんなに心配かけるから、と。
02 EE: 皆さんもそうでしょうね。
03 誰でも自分の姿を通して、みんなが元気になってくれたら最高に嬉しい。
04 やっぱ何が好きって、自分だけのことじゃなくて、周りが元気になるとか、人の役に立つ、人に必要とされている、人が喜んでくれる、って一番の喜びじゃないですか。
05 ER: 年取ってすごく感じます。
06 自分だけの満足って大したことないなって。
07 ER: そうなんですよ。
08 若い時は自己満足に最高に力入れてたんだけど、だんだん年齢経てくると、いい意味の自己満足ですけど、人の喜ぶ顔が何よりも自分の喜びになってきますね。
09 環境を変えていくのは自分ですからね。
10 自分次第。

インタビューによって語られたナラティブが一般的には理解されにくい内容である場合、また、抽象的でわかりにくい場合に、具体例や新たなナラティブを引き出すためにインタビュアーは自己開示をストラテジーとして用いる。インタビューにとっては、インタビュアーのそのような発話行為に対して補足や解釈をする必要性を感じ、レジリエンス作用として発話を行う。但し、ナラティブがデリケートなテーマである場合が多いため、インタビュアーは自分を低く見積もって自己開示をする必要がある。このストラテジーも、インタビューとインタビュアーの間にコンテキストの違いがあると、ストラテジーとして機能しないこと場合がある

3.3 反射的あいづち

共話といわれる日本語の会話は、話し手が一方的に話すのではなく、聞き手もあいづちを打ち、両者で共につくりあげていく。今石(1993)は、あいづちには情報のフィードバック機能があるとし、両者の反応は互いにフィードバックされていくとする。以下のELANで表示したものは、肌の美白についてのインタビューの一部である。オーバーラップしているあいづちを○で囲い、ポーズの部分に現れたあいづちを□で囲った。なぜ、語や句の切れ目ではなく、インタビューの発話中にオーバーラップしてあいづちが出現したのか。

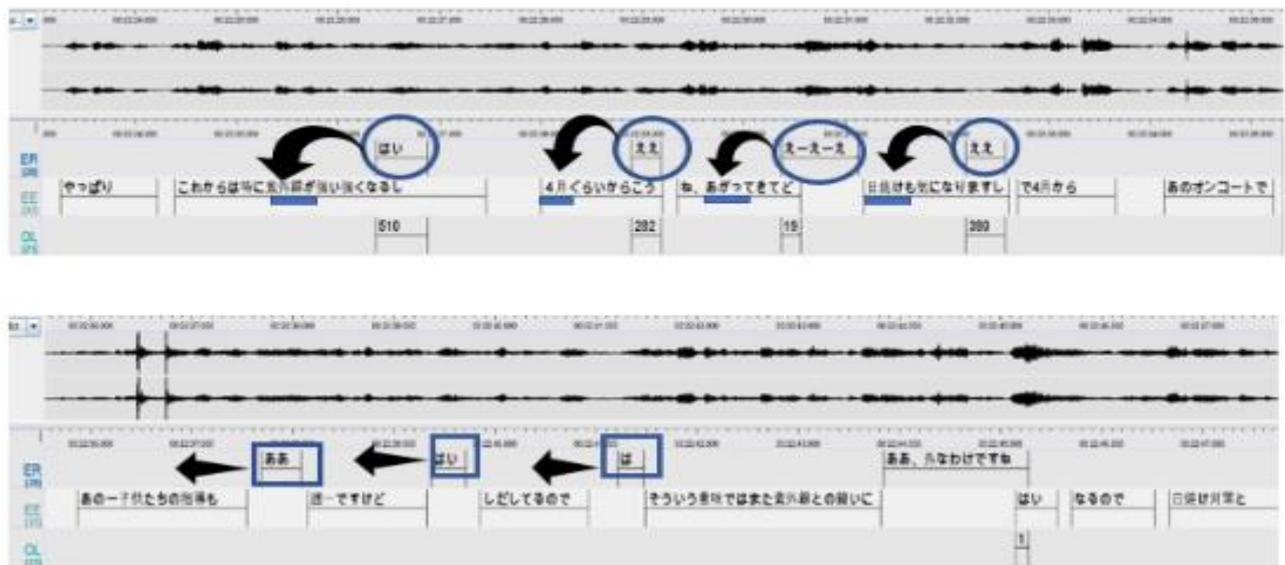


図1 反射的あいづち

会話の内容から分析を試みると、インタビュアーは記事に必須の語が発せられたことに反応して瞬発的に、あいづちを打っていた。そのあいづちを句の切れ目に出現するあいづちと分けるため「反射的あいづち」とする。反射的あいづちはインタビュイーの気持ちが表出したもので、それは瞬時にインタビュイーに、その話を続けて欲しいというシグナルとしてフィードバックされ、この話は歓迎されていると理解したインタビュイーは先を続けた。

反射的あいづちはインタビュアーの気持ちがより素早くフィードバックされるため、インタビュイーは話の継続を早い段階で決めることができ、スムーズにナラティブの継続が促されたと思われる。要求されたことにインタビュイーが能動的に発話をするというレジエンス作用のひとつといえる。

なお、永田 (2004) は、ポーズが置かれない場所 (発話途中) に生起する反復型のあいづちは、理解や同意を強く示す特性があると述べているが、本論文でみられた発話途中のあいづちが必ずしも反復型と限らないこと、および該当部分の発話者の内省から、ここでは反射的なものとする。

4 まとめ

本研究では、3つのレジエンス作用を利用した聞き手のストラテジーを見出した。雑誌のインタビューにおいては、インタビュアーは聞きたいことを質問という言語形式にするだけでなく、話し手に期待して共に会話を作り上げる共話のスタイルをストラテジーとして取り入れていることがわかった。今後は日本語の会話のスキルアップを共話であることを前提とした方法論で考えていきたい。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者の日本語会話」 『コミュニケーションのための日本語研究』 pp. 13-20.
 岡田美智男 (2012) 『弱いロボット』 医学書院
 ミハエル・バフチン (1979) 『小説の言葉』 平凡社
 林要 (2018) 「LOVOT をつくった林要が考える、ロボットの「新しい宿命」」 WIRED